

駿府静岡 と私

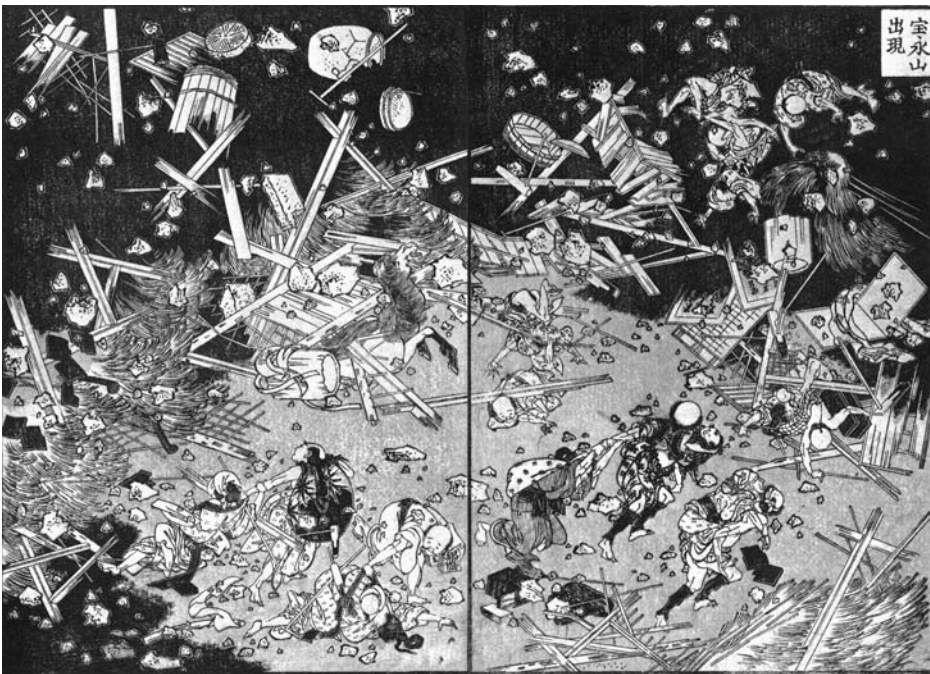
【第34回】



天変地異と吉宗公

よしむね

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝つねなり



葛飾北斎「宝永山出現」『富嶽百景』天保5年(1834)発刊より。宝永4年(1707)11月23日の巳の刻(午前10時)、富士山は鳴動して南東斜面から噴火した。天地は暗闇となり、火口から軽石を飛ばした。噴煙は12月8日夜まで及んで鎮静した。この震動で家屋が潰れた住民があわてて足弱の家族を引いて避難する様を、北斎は想像で描いた。

華やかだった元禄から年号が宝永に替わる頃から、事態は始めは静かに、そして段々と急激に、大きく変わってきます。

百年間、拡大を続けてきた農地は、もう当時の技術ではこれ以上増やすことのできないギリギリのところまで開発されてしまいます。金・銀の採掘量も急速に低下します。

元禄の最後の年(一七〇三)に関東で大きな地震(元禄大地震)が発生。翌年の宝永元年には浅間山が大噴火し、再建途上の江戸も再三の大火に見舞われます。

三年後の宝永四年、宝永大地震が発生し、東海道・南海道・畿内・信濃・甲斐に大きな被害を与え、地震の直後に巨大津波が発生し、その被害は房総から九州に及び、伊豆半島から紀伊半島にかけて、また四国の土佐で大

きな被害が発生しました。その約一カ月後、富士山が大噴火を起こして宝永山が誕生し、東海地方に再び大被害を与えました。

宝永年間はまだ、全国の気温が徐々に下降を始めた時代で、東北の米作りは不振となり、各地で大洪水も発生して凶作が続きます。日本は花の元禄バブルから一転して、長い停滞の時代に移っていきます。

昭和二十一年から今日までの六十五年余りの間に私たちに起こったことも全く同じパターンではなかったか、と感じています。東日本大震災と巨大津波、原発の事故と汚染、エネルギーコストの上昇と温暖化の進行……。

その難しい時代(享保元年一七一六)に八代将軍として登場した吉宗公は、すでに十年間、紀州藩主として疲弊する藩の立て

直しに奮闘してきた方でした。紀州時代の有能な部下を幕府の中枢に置いて、まず「目安箱」をつくり、人々の声を将軍が直接聞くことのできる体制とし、「御庭番」を置いて世情の実態を報告させます。

同時に彼は徹底した「質素節約」の方針を打ち出します。まず槍玉にあがったのは江戸城内で、彼自身、儀式の日を除いて一年中、木綿の服を着て裸足で過ごし、食事は一汁三菜に変えました。さらに幕閣の首脳陣の任命も、従来家の格と禄高による任命から、能力本位の任命に切り替えます。質素節約令は幕府の統治する全ての地に広がり、日本中が一時期、冬に覆われたようになりました。

吉宗公は、質素節約の方針で社会全体が暗くなることに対し、色々な手を打ちました。